

「あの時代」の記憶と、「この時代」の現実が、重なり合つ島、沖縄。
この島に昨年も42万人の修学旅行生たちが訪れた。

彼らは何と出会えたのか…。

全国高等学校演劇大会最優秀賞を受賞し、

絶賛された作品を作者・畠澤聖悟氏が青年劇場に書き下ろし、
演出・藤井ごう氏を演出に迎えて挑む！マーク付きの意欲作。

修学旅行について

高校演劇には「戦争モノ」というジャンルが存在する。

反戦のメッセージ、平和への祈りを高らかに歌い上げる。このジャンルに属する作品は実に多いのだが、扱われる題材は原爆や空襲や特攻、つまり六年前の太平洋戦争に限られる。現代日本の高校生にとって平和を考えることは過去の戦争について考えることであるらしい。批判しているのではない。意義のあることだ。大事なことだ。祖父母の記憶は決して風化させてはならない。

しかし、である。

こうしている間にも内戦状態となつたイラクでは毎日誰かが銃弾や爆弾の犠牲となり、一三万あまりの兵を駐屯させたままのアメリカは、更に約三万の増派を宣言した。

「平和とは、どこかで進行している戦争を知らずにいられる、つかの間の優雅な無知だ」

アメリカの詩人、エドナ・セント・ビンセント・ミレーは一九四〇年にそう書いた。高校生に限らず、現代の日本人は現代の戦争との接点を持たない。接点がないということは共通の基盤の上にないということである。自分の問題として考へることが出来ないということである。

ならば、と考えた。

戦場や戦火に巻き込まれた町ではなく、ありふれた現代日本の生活場面や使つて現代の戦争を描くことはできないか。そうすれば接点のないところに接点を作ることができるはずだ。

「修学旅行」の舞台は沖縄の旅館の一室であり、そこで繰り広げられるのは五人の女子高生によるケンカである。たわいなさを笑って頂いて結構。しかしどタバタの中に込められたささやかなメッセージを読み取り、「どこかで進行している戦争」に思いを馳せて頂ければ、作者としてそれにまさる喜びはない。

畠澤聖悟



畠澤聖悟 (はた澤聖悟)

1964年、秋田県生まれ。劇作家・演出家。演劇プロデュースユニット「渡辺源四郎商店」店主。05年、「俺の屍を越えていけ」で日本劇作家大賞短編戯曲コンクール最優秀賞。現職公立高校教諭でもあり演劇部顧問。自らの作・演出で各種高校演劇コンクールに出場05年「修学旅行」で最優秀賞・文部科学大臣奨励賞。



2005年

1974年、東京都生まれ。劇作家・演出家。演劇団R-vive主宰。その全ての作品(企画其の九)の作・演出を担当。2001年より高瀬久男氏(文学座演出家)の演出助手として活動。近年、俳優養成所・ワークショップ講師・文化振興事業、子どもやアマチュア主体の演劇公演や他劇団公演の演出など、活動の幅を広げる。



龜井幸代



細瀬文雄



秋山亜紀子



高山康宏



永田江里



大山秋
田代晋太郎 (客演)



相栗満子



伊藤めぐみ



平井光子

作・畠澤聖悟

演出・藤井ごう

製作・大屋寿朗

修学旅行

秋田雨雀・土方与志記念
青年劇場



秋田雨雀・土方与志記念青年劇場

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-20 間川ビル4F TEL.03 (3352) 6922 FAX.03 (3352) 9418



撮影: 藏原輝人

